

資料館だより

平成 15 年 (2 0 0 3)
9 月 1 日

編集・発行 市立歴史民俗資料館 〒208-0004 東京都武蔵村山市本町5-21-1 TEL 042(560)6620



写真左：カブトムシ（野山北公園） 右：オオバタグルミの種子の化石（市内神明地区）

「夏休みミニ展示」を開催

「昆虫の標本」 「狭山丘陵周辺で発見された化石たち」

武蔵村山市は、緑豊かな狭山丘陵を背にその南麓に広がる武蔵野台地に位置しています。私たちに身近な狭山丘陵は、古多摩川に浸食されずに残った中洲状の地形をしており、丘陵全体をおおう豊かな森林とともに、動植物や昆虫、地形・地質など数多くの貴重な「自然の財産」を今に残してくれています。

歴史民俗資料館では、7月20日から8月31日にかけて、緑と太陽に恵まれた武蔵村山市と狭山丘陵の「自然」をテーマにした「夏休みミニ展示」を開催しました。

今号は、展示にご協力いただいた元市史編集委員の加賀美亨氏と元市史専門調査員の福嶋徹氏の解説を掲載します。

狭山丘陵の昆虫の世界

元市史編集委員 加賀美 亨

今では東京近郊にすっかり珍しくなってしまった里山の雑木林が緑を連ねる。住宅で埋め尽くされた大海に島のように残された狭山丘陵。

雑木林を構成する主な樹木は、秋にドングリをつけるコナラやクヌギ。春早く落ち葉の上を飛び回る茶色い小型のミヤマセセリは幼虫がこれらの葉を食う。梅雨時に出現し夕暮れ樹冠をちらちら飛ぶオレンジ色のアカシジミやウラナミアカシジミ、遅れて出てくる灰色のミズイロオナガシジミも葉を食って育つ。真夏に出現する大型のヤマユガヤオオミズアオも葉を餌としている。十二月になってから出現するクロスジフユエダシャクもこの木に依存している。



アカシジミ

大型のシロスジカミキリは幹をかじり卵を産み付ける。材を食って育った幼虫は脱皮して大きな穴を開け成虫となって出てくる。その穴からは樹液が出てくる。樹液を求めて、オオムラサキやサトキマダラヒカゲなどの蝶、カブトムシやコクワガタ・カナブンなどの甲虫類、スズメバチなどのハチ類とたくさんの昆虫が集まってくる。夜にはフクラスズメやノコメセダカヨトウなどのガ類が樹液を吸いに来る。木の根元には、死んだカブトムシなどを食っているアオオサムシやオオシテムシが見られる。夜はガを狙ってヒキガエルもやってくる。雑木林にはエノキも点在する。葉はオオムラサキやゴマダラ

チョウ、テングチョウの幼虫が食う。夏の盛りには樹冠をヤマトタマムシが光を浴びて緑色に輝いて飛び回る。



オオムラサキ

丘陵の尾根部にはアカマツが生える。春たけなわになると、ハルゼミが枝先で鳴く。一匹が鳴くと周囲のものも鳴き出し、大合唱になる。樹皮は冬になると絶好の越冬場所。樹皮を起すと、真っ黒なヤニサシガメが脚を縮めて集団で越冬している。

丘陵からしみ出した水は所々に湿地をつくる。湿地にはアカガエルやトウキョウサンショウウオが産卵する。梅雨時までの湿地はこれらの幼生でいっぱいになる。どこからか飛んでくるのだろう。アメンボが水面に群れ、ヒメゲンゴロウが水に沈んだ葉に隠れる。湿地はトンボの類の産卵場所。オニヤンマが湿地をパトロールし、サナエトンボが草むらの葉にとまる。

湿地に生えるハンノキの葉はミドリシジミの幼虫が食う。梅雨時の夕方、樹冠を数匹で舞うように飛ぶ成虫の姿は、金属光沢をもった美しい緑色。

とりたてて珍しい光景ではないが、丘陵の木々やその周囲の環境には、それぞれに深い関係をもった多くの昆虫の姿が見られる。

(写真はいずれも加賀美亨氏撮影)

武蔵村山市は「化石の宝庫」

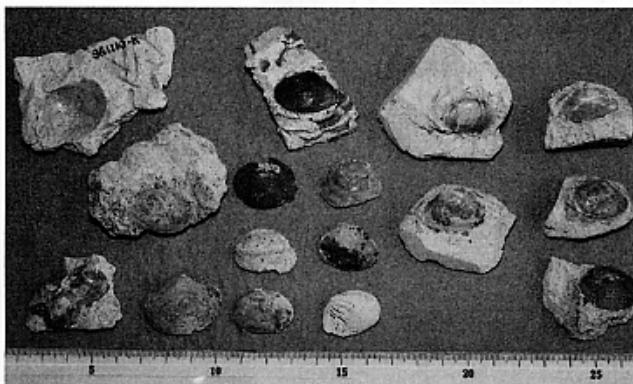
元市史専門調査員 福嶋 徹

1 市内が海だった頃の化石たち

武蔵村山市の神明2丁目から中藤2丁目一帯は、見晴らしの良い狭山丘陵南麓の小高い丘です。近年、丘が切り崩され、マンションや住宅が建ち並びました。この地域の地質は、「谷ツ粘土層」という海成堆積物（海だった頃に堆積した地層）で形成されています。「粘土層」という名のとおり、神明・中藤地区の地盤には粘土層が堆積しています。宅地造成がきっかけとなり、谷ツ粘土層の地層が姿をあらわしました。そこからは、武蔵村山市がかつて遠浅の海だった頃に生息していた貝や植物の化石がたくさん発見され、その場所に住んでいたカニやエビなどの巣穴の化石も見つかりました。また、谷ツ粘土層からは、現在の三河湾より南、有明海などの温暖な地域にしか棲んでいないハイガイの化石が多く見つかりました。このことから、当時は温暖な内湾奥の干潟のような環境が広がっていたこととなります。

2 狭山丘陵の貝化石

狭山丘陵の地層では、「三ツ木礫層」の中に1mから2mの厚さで貝が含まれる層が広がっています。「大澤貝層」とよばれていますが、マガキをはじめ、ヒメシラトリガイ、オキシジミガイ、タマキビガイ、ヤマトシジミ、カワアイ、イボウミニナ、ウネナシトマヤガイなどが数多く見つかりました。その後の調査により、貝化石の種類は30種類にもなります。



ヒメシラトリガイの化石

3 「ハンカチノキ」の“タネ”の化石

植物化石は、砂質の粘土層部分に球果や堅果、種子などが掃き寄せられ密集した状態で見つかります。特に神明地区からは、トウヒ属、マツ属、トガサワラ属などの堅果やメタセコイア、オオバタグルミなど、日本では絶滅した植物の化石が数多く見つかりました。同じ地層が続く狭山湖の露頭からは、オオバタグルミ、コナンキンハゼとともに、日本でも発見例が少なくとても珍しい「ハンカチノキ」の種子も3個見つかりました。



ハンカチノキの種子化石

4 「進化」するオオバタグルミ

原始のクルミであり、日本では現在絶滅しているオオバタグルミの化石は、世界各地で発見されています。そのため、地質年代を示す標準化石に指定されています。その大きさは最大で7.5cmもあり、溝が極めて深く新生代・鮮新世後期（300万年前）から更新世前期（110万年）の頃まで繁殖しました。ところが、110万年前、オオバタグルミは地上から姿を消し、現生のオニグルミへと進化を遂げます。これは当時、造山運動の活発化や同時に起こった海面上昇の影響を受けたため、低地に生息していたオオバタグルミなどの植物群は、生き続けるために環境に順応していったと考えられています。ちなみに、日本で最初にオオバタグルミを発見し学会に発表したのは『銀河鉄道の夜』などで知られる宮沢賢治です。他にも、魚の化石など珍しい化石の発見が相次いだことにより、武蔵村山市が今も昔も貴重な「自然の宝庫」であることがわかります。（写真はいずれも福嶋徹氏撮影）

資料館利用状況（平成14年度）

	開館日数 (日)	利用者数 (人)	市 内		市 外	
			人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)
4月	23	892	404	45.3	488	54.7
5月	23	761	382	50.2	379	49.8
6月	25	1,021	507	49.7	514	50.3
7月	24	766	408	53.3	358	46.7
8月	26	1,152	496	43.1	656	56.9
9月	17	618	253	40.9	365	59.1
10月	25	980	472	48.2	508	51.8
11月	23	980	399	40.7	581	59.3
12月	21	657	354	53.9	303	46.1
1月	22	653	309	47.3	344	52.7
2月	22	857	556	64.9	301	35.1
3月	24	887	545	61.4	342	38.6
合計	275	10,224	5,085	49.7	5,139	50.3

※上記は団体含む

江戸開府400年事業シンボルマーク



江戸
開府
400
東京

400 Years from Edo to Tokyo

〈編集後記〉

◆歴史民俗資料館は今秋で開館22周年を迎えます。これまで、歴史・民俗・自然に関する特別展示をさまざまな角度から開催してきました。そして現在、資料館の充実を図るべく、将来構想の一環としてホームページ開設の準備を進めています。ご期待ください。

◆今年は「江戸開府400年」の年です。当館でも江戸時代に関連した企画として、10月下旬から12月中旬にかけて企画展「市内に残る江戸時代の村絵図」を開催します。期間中は、平成4年度から14年度にかけて行った市史編さん事業の調査で整理・収集された関連資料を中心に展示する予定です。